

て、現代における迷宮図像群を活用するスピリチュアリティと、スミツソンの作品「スパイラル・ジェットイ」には一定の類似性を見出すことができる。

スピリチュアリティとアースワークの比較へと敷衍するならば、スピリチュアリティが宗教教団や教義といった伝統、制度的なものにしばられない傾向を有する意識・精神性であることと似て、アースワークでは、作品制作の場として、美術館や画廊の外が主として選択されている。作家たちが、従来の美的制度に依らない実践の方法を探っていることに特徴があるといえるだろう。

なお、迷宮図像群のなかでも特に、クレタ型迷宮と呼ばれる、古代から伝わるタイプのものは、中世キリスト教において生まれたシャルトル型の迷宮と比較して描くのが容易であり、砂浜や芝生などの地面に直接描かれたり、石などを並べる、あるいは植物を植えるなどして構築される傾向にある。自然が素材になりやすいという点において、クレタ型迷宮は、アースワークの流れを汲んでいると指摘することができるのではないだろうか。

第十四部会

宗教性の行動と社会貢献

濱田 陽

ここに定義する「宗教性の行動」とは、自分の力と知覚を超えた、ある尊い何かに心をゆだね、それを振り所としてなす行為である。ヨアヒム・ヴァッハは宗教経験の条件として1究極的実在への応答、2全人格的経験、3強烈さの自覚、4行動に帰結することの四条件を挙げた。ここでは、宗教経験の一条件に行動が含まれている。これに対し、行動面に焦点を合わせ、独立したコンセプトを立てることで、宗教経験について考え方や立場を異にしている行動をめぐる対話が可能となるような枠組みをめざしたい。宗教性の行動は、ある宗教を信じているから、ある宗教の教団に属しているからといって、それだけではない。ある宗教を信じ、ある教団に属しているとしても、自分の力と知覚を超えた何かを振り所とする気持ちが弱まることもある。逆に、とくに特定の宗教の教えを感じている自覚がなく教団に属していない人でも、人生の重大局面に直面して一時的にせよ、その何かに心をゆだねる行為に出る場合も想像できよう。

宗教性の行動には、ある尊い何かを振り所とする動機が外に明示されないものと、明示されるものがある。私たちは、多くの場合、一人の人間として、一般の行動とここで言うところの宗教性の行動との間を揺れ動く存在ではないだろうか。私たち

の社会は、宗教性の行動と一般の行動のどちらか一方だけで成り立っているのではない。もし、これらの関係が理解されず、常に不毛な衝突を引き起こすとしたら、私たちの社会は非常に住みにくいものになってしまうだろう。人類の先人たちは長い時間をかけ、宗教性の行動を自分以外の人間が知り、人生に有益な知恵として学ぶことができるよう、文化のさまざまな形態をもって伝承してきた。教典、儀礼、神話などはその記録に満ちているともいえる。

宗教性の行動が、個人の領域を出て社会性を帯びるとき、「宗教性の社会行動」と呼ぶことにしよう。宗教性の社会行動にも、一般社会や他者に動機が明示されないものと、明示されるものの二種類がある。さらに、宗教性の社会行動において、実際に一般社会や他者を益している行為を、「宗教性の社会貢献活動」と呼ぼう。宗教性の行動が、自分の力と知覚を超えた何かを拠り所にした行為だとしたら、「宗教の活動」は、ある宗教（や教団）の名においてなされる活動とでもいい。そうすると、「宗教の社会活動」は、この宗教の活動が社会性を帯びる場合を示すことになる。ある宗教の名においてなされるのであるから、宗教との関わりは、一般社会や他者にとって明示的である。明示された宗教性の社会行動は、宗教の名を冠した動機の明示性により、宗教の社会活動に当てはまる。

宗教の社会活動が現実一般社会や他者に益をもたらし、るとき、それを「宗教の社会貢献活動」と呼んでよいだろう。そして、ここにおいて、宗教的動機が見失われていないなら、それは、明示された宗教性の行動が社会性を備え、同時に、社

会を益している場合といえる。宗教の社会貢献活動は宗教の名においてなされ、一般社会や他者に益をもたらし行動であるから、宗教と社会の接点を考える上できわめて重要である。しかし、活動する人間に即して考えてみると、基本は、宗教性の行動にある。もし、その動機を見失ってしまう場合、いくら宗教の名においてなされ、社会を益するよう見えたとしても、それは精神の軸を失っていることになる。そして、動機が揺らいでくれば、活動そのものも、いつしか変化してしまうことが予想される。私たちは、宗教の社会貢献活動について考えるためにときに立ち止まって、ここに述べるような宗教性の行動について考え、宗教の活動について確認し、それぞれの社会との関わりと両者の関係を分析してみなければならぬ。そうすれば、宗教の社会貢献活動の核心に宗教性の行動があることが分かるだろう。

宗教専門紙が報じる過疎問題

—— 仏教・神道系新聞を手がかりに ——

冬月 律

我が国全国津々浦々に鎮座する寺院と神社は、古くから人々の年中行事や人生儀礼（通過儀礼）と深く関わりを持ちながら長年地域に存在し続けてきた。そのような存在であった寺院と神社が現代では過疎化・少子高齢化などによって消滅の危機に晒されている。急激に変貌する現代社会の神道と仏教において共通する「地域社会の空洞化」と「伝統的な宗教文化の希薄化」は重大な問題であろう。